

# 中世から近代の辞書に見る字音の消長

## —呉音 2 「客」—

黒沢晶子（東北文教大学）

akuros9638@gmail.com

### 【要約】

本稿では現代語で呉音のほうがよく使われる常用漢字 30 字について、同じ漢字の中世における読みを『落葉集』によって調査し、呉音と漢音への偏りの類型にどのようなものがあるか、中世から現代に至るまでにどのような字音の推移が見られるかを考察した。30 字の範囲では、中世も現代も呉音読みが漢音読みより 3 倍以上ある「強い呉音」が最も多く、16 字ある。しかし、中世と現代とで優勢な字音が漢音から呉音へと交替した漢字もある。その中でも変化の幅が大きかった「客」に本稿後半では焦点を当てる。「客」は、漢音「かく」の優勢が長く続き、呉音「きゃく」への推移が近代に至ってもまだ始まってさえいない語もあった。そこで、中世から現代まで続けて使われてきた語の字音が変わった時期を近代初頭までの辞書だけでなく、明治・大正のコーパスや昭和のアクセント辞典を用いて特定することを試みた。さらに、明治になって新しく造られた近代語についても多くの言語資料から、それらの語がいつ呉音で読まれるようになったかをつきとめ、「近代の新造語は常に新しい字音で読まれる」わけではないことを明らかにした。また、国語辞典と発音アクセント辞典とでは字音の交替時期に違いがあること、それは国語辞典が古語や文語も守備範囲に入れるのに対し、発音アクセント辞典は、発行時の標準的な発音を反映するためであると考えられる。

### 1. はじめに

日本語の漢字には一つの字に複数の音読みのあるものが少なくない。中国語にも一字複数音はあるが、異なる音は異なる意味を表すのが原則である。日本語でも一字複数音が意味の違いを反映しているものもある。例えば「仏」のブツは「仏教」「仏像」の「ほとけ」と、フツは「仏語」「日仏」の「フランス」にそれぞれ対応する。が、それ以上に異字音同義が顕著である（例：「京」はキョウでもケイでも「みやこ」を表す。）（湯沢 2017）<sup>1</sup>。この日本語の一字複数音は歴史的に見て減っていく方向にあるという。屋名池（2005）は、現代日本語と明治になる直前の漢字の音読みを比較した結果<sup>2</sup>、共通して表れる文字のうち一音のみのものが約 76%から約 80%に増えていることから、「漢字音の一元化」が進行していると述べている。また、現代語の複数字音の 9 割以上が有標・無標によって読み分けられ<sup>3</sup>、それ以外にも意味や専門分野・ジャンル、漢字の位置による読み分けがなされるという。

一字複数音解消が時代が下るにつれ進む過程は、石山（2024）によっても示されている。複数音を持つ漢字の割合は、『日葡辞書』（1603-04）で 26.9% だったが、『和英語林集成』第三版（1886）23.1%、

<sup>1</sup> 台湾語の漢字音にも読書音と俗音という複数の字音が存在する（中澤 2012）。

<sup>2</sup> 現代語の資料は国立国語研究所（1963）『現代雑誌九十種の用語・用字 第二分冊 漢字表』所載の「用法別漢字表」、明治直前の資料はヘボンの『和英語林集成』初版（1867）。

<sup>3</sup> 例えば「殺」は無標サツ、有標セツ（殺生）、サイ（相殺）。少数の有標語彙以外は無標の字音で読む。

『和仏小辞典』(1904) 17.4%を経て、『三省堂ポケット日用語辞典』(2019) では 16.7%にまで減っている。また、石山(2023、2024)、大島(2023、2025)は「漢字音の一元化」が中世以前から進行していたことも検証している。

一字複数音には呉音・漢音によるものが最も多い。飛田(1968)は、『和英語林集成』初版(1867)の漢語から見て、明治・大正時代に刊行された18種類の辞書のどれにそれまでと異なる字音が出現したかを調査した。すると、呉音から漢音に交替したもの115語(例:差別 しゃべつ→さべつ)に対し、漢音から呉音に替わったもの(例:音信 いんしん→おんしん)は32語だった。飛田も漢字音は一字一音に統一される傾向が認められるとする。また、呉音から漢音への交替のほうが多い理由として、明治維新後、学制の公布によって漢語が特定の教養人だけのものではなくなった際、長い間学問(儒学)の世界の伝統であった漢音が規範とされたことを挙げている。

呉音漢音の別を支えてきた柱は仏教界と儒教界であり、それぞれのアイデンティティ確立のためだった(中澤2011、湯沢2017)。呉音漢音には「上 ジョウ・ショウ」「神 ジン・シン」「大 ダイ・タイ」「道 ドウ・トウ」など清濁だけの違いによるものが少なくない。このペアでは濁音が呉音、清音が漢音であるが、室町時代の『文明本節用集』という辞書は、漢音(清音)で読むべきものに「不濁点」が付与されたことで知られている。小松(1971)によれば、不濁点とは、その字を濁って読んでではないと注意を喚起するもので、特に漢籍から用例が引かれている場合に用いられた。例えば、『礼記』からの引用文中の「独学」には「ト°クカ°ク」とふりがなが施されている。この仮名右肩に打たれた「°」が不濁点である。これは「ドクガク」ではなく「トクカク」と読めという指示である。室町時代の日本語を収録した『落葉集』『日葡辞書』ではともに「ドクガク」となっており、一般的に通用していたのは「独=ドク」「学=ガク」という呉音読みの方だったことを示唆している。漢音には、このように学問の世界における読書音として守ろうとされたが、より支配的だった呉音に吸収されていたものが含まれる。

本稿では、「打」(黒沢2020)、「眠」(黒沢2021)、「物」(黒沢2022)、「言」(黒沢2023)、「呉音」(黒沢2024)に続いて、漢字音が中世から近代にかけて、どのように勢力を変化させて来たかを見ていきたい。

図1、図2、図3を見ると、現代に生きる私たちは「ひんきやく」「じょうきやく」「きやくかん」と読むだろう。だが、過去においては「ひんかく」「じょうかく」「かくかん(かっかん)」と読んでいた時代がある。図1は、1861年の『江戸大節用海内蔵』という辞書、図2は徳富蘆花の「順礼紀行」(1906)、図3は夏目漱石の「草枕」(1907)だが、ともに「客」に「かく」と振り仮名が打たれている。今の私たちから見るとかなり違和感があるが、これが江戸時代、明治時代の一般的な読み方だったことがわかる。現在は呉音「きやく」がもっぱら使われるようになった。漢音「かく」から呉音「きやく」へ。本稿では、その字音の変化を追ってみたい。

以下、第2節で黒沢(2024)を振り返り、本稿の研究課題について述べる。第3節で調査方法を説明し、第4節で調査結果を見ていく。まず、第4節で研究課題1~3に答える。第5節で「客」の字音の交替を、中世から続く語と近代の新造語とに分けて詳述し、改めて研究課題3に答える。最後に、第6節でまとめと今後の課題について述べたい。

## 2. 黒沢(2024)と本稿の研究課題

黒沢(2024)では、現代語で呉音のほうが漢音より優勢な漢字について、中世の字音と比較したと

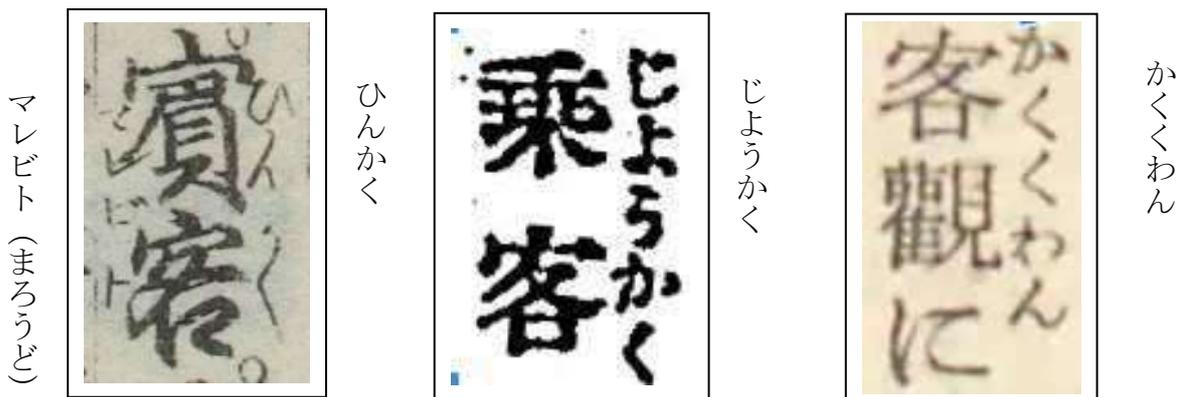


図1：賓客（1861）  
『江戸大節用海内蔵』

図2：乗客（1906）  
徳富蘆花「順礼紀行」

図3：客観（1907）  
夏目漱石「草枕」

きの類型を見た。先行研究では、近代になってから、呉音が漢音に交替した字のほうが漢音が呉音に交替した字より多いことがわかっている。では、呉音のほうが漢音よりも優勢なのは、どのような字なのか。「優勢」の度合はどのくらいなのか。ある漢字を字音で読む語について、中世は『落葉集』、現代はBCCWJで検索し、抽出された異なり語数を数えた。呉音読みの語が漢音読みの語より多いものから取り上げた10字は、字音交替の視点から3つに分けることができる。一つ目は、強い多数派が現代も勢力を維持している字（自、今、図）、二つ目は、中世は少数派の字音も一定数使われていたが、その後多数派が勢力を拡大ないし維持した字（無、上、情；大）、三つ目は、中世は漢音のほうが優勢だったが現代語で逆転した字（日、台、客）である。「日」は、近代語の造語の際、「日本」を含んだり、「日」が日本を意味したりする語が目立つ。開国して、諸外国との対比で「日本」を意識し、日本と外国との関係を表す語が増えたのではないか。このように、字によって個別の理由が他の字にもあるかもしれない。このほか、「無」の字音が漢音「ぶ」から呉音「む」に交替した字音語について、中世から近代にかけての辞書調査を行い、概ね近代か近代に近い時期に交替が見られることがわかった。「無」に起こった字音の交替は、「主な字音を変化させる推進力」ではなく、中世以来の多数派「む」がさらなる勢力固めをする力になったと考えられる。

「無」は室町時代の言葉を載せる『落葉集』では呉音「む」で読む語が7割余りで多数派だったが、現代語（BCCWJ）では9割余りへとさらに増えている。このように、ひとつの漢字音が優勢になって、とどまることなく多様性の反対方向へ向かう現象を屋名池（2005）は「漢字音の一元化」と呼ぶ。一方、「無力」は少数派の漢音「ぶ」で「ぶりよく」と読んでいたが、現代語では「むりよく（む：呉音）」と読むようになった。これは、「少数派が多数派に交替」（屋名池 2005）に該当すると言えよう。

本稿では、以上を踏まえて、次の3点を研究課題としたい。

RQ1：現代語で呉音読みが漢音読みより多い字には、どのようなものがあるか

RQ2：「漢字音の一元化」（屋名池 2005）は、どのくらい進んでいるのか

RQ3：二つの字音が共存・綱引きしている字には、どのようなものがあるか

一元化に距離のありそうな漢字音の例として「客」を見ていく。「客」は、中世は漢音「かく」優勢だったものが現代は呉音「きゃく」が優勢となったが、その交替には長い時間がかかっている。

### 3. 調査方法

#### 3.1 調査対象とする漢字の抽出

調査に当たって、調査対象とする漢字を抽出した。まず常用漢字音訓表に字音があり、徳弘（2008）で「よく使われる」順位<sup>4</sup>が600位までのものを抜き出した。次に、呉音と漢音の優勢度を比べるのが目的であるところから、呉音と漢音の形が異なり、かつどちらも常用漢字音であるCの漢字群を調査対象とする。また、その字が常用漢字であるだけでなく、呉音、漢音どちらも常用漢字音訓表にある字を取り上げたい。常用漢字音訓表にある字音が、現代語で相対的によく使われるものだとすれば、「現役」としての力を持つ字音同士を比べることができると思われるためである。呉音・漢音・慣用音等の判断には『漢字源』を基本とし、『漢辞海』第四版、『三省堂五十音引き漢和辞典』第二版を参照した。

表1 徳弘（2008）高頻度600字の内訳 Cが本稿の調査対象

	字数	比率 %	例
A 呉音・漢音同形	211	35.2	中 本 国 子 東 三 円 者 五 新 方 四 小 思
B 呉音・漢音の一方または両方が常用漢字表音ではない	271	45.2	年 十 時 前 八 七 県 氏 見 画 <sup>5</sup> ; 同 合 動 院 増 研 軍 危 接
C 呉音・漢音異形かつ両方が常用漢字音（Dを除く）	98	16.3	日 大 上 今 自 相 無 音 情 客 図 ; 会 人 生 行 金 力 地 間 ; 由
D Cの条件を満たすが、何らかの理由で呉音・漢音の対立が見にくいもの	20	3.3	1 見出し数10未満（中世）： 井 富 示 省 絵 米 仕 切 回 工 反 建 久 室 静 2 呉音・漢音以外の字音：宮 ぐう 重 ちう、強 かう（中世） 3 促音化例が 呉音か漢音か決定しがたい： 一 吉
計	600		

600字の内訳は表1のようになる。600字のうち、Cは98字に過ぎない。

Bのうち、呉音または漢音の一方が常用漢字音以外であるものの例を挙げると、「時」は呉音「じ」、漢音「し」だが、「し」は表外音である。また、「危」は呉音漢音ともに「ぎ」だが、常用漢字音ではない。私たちが普段使う「き」は常用漢字音だが、慣用音である。中国原音では「疑」と同じ頭子音を持つが、日本語では「き」で定着してしまった。

Dは、Cの条件を満たし、一旦調査対象とした漢字の中で、何らかの理由で呉音・漢音の対立が見にくいことが明らかになったものである。一つ目は、現代または中世の資料（後述）で語数が10未満

<sup>4</sup> 徳弘（2008）は、新聞に使われた語の頻度・親密度データ（天野・近藤2000）に基づき、漢字を含む36,000語に学習指標値等を加えた「KanjiVocab36000」によって順位を決めている。

<sup>5</sup> 「画」は「が」と「かく」が常用漢字音だが、非入声音と入声音という別のカテゴリーで対にならない。

の字である。二つ目は、字形は同じだが、複数字音がもともと異なるカテゴリーに属している字である。三つ目は、呉音・漢音以外の字音が一定数を占めるケースであり、これには慣用音（宮ぐう）、現代の漢字辞書に記載がなく、呉音とも漢音とも言えない「第三の音形」（大島 2023b:39）「強 かう」「重 ちう」がある。「宮」は、呉音が「く」、漢音が「きゅう」だが、それ以外に「ぐう」という慣用音がある。「東照宮」「神宮」「宮司」など、NLB で抽出した「宮」を含む字音語の 42%を占める。呉音と漢音だけを対照することはできるが、それでは「宮」の字音の使用実態が反映されたとは言えないため、対象から除いた<sup>6</sup>。

D の四つ目は、促音化して現代語で「〜っ」で表される字音が呉音なのか漢音なのか、見分けが付きにくいもので、「一」「吉」がこれに当たる。例えば、「一方」「一生」「一体」「一角」は現代仮名遣いで「いっぽう」「いっしょう」「いったい」「いっかく」と書く。これは呉音「いち」なのか、それとも漢音「いつ」なのか。促音化しない「一部」「一時」「一代」「一眼」で「一」を「いち」と読むのであるから、「いっ」と読む場合も本来「いち」だったものが後続子音に同化して促音化したと考えるべきではないか。

「吉」は、「よいこと、めでたいこと」の意味で「きち」とも「きつ」とも読まれる。熟語には「吉凶（きつきょう）」「吉例（きちれい）」「吉事（きちじ）」などがある。「きつ」は「きち」と「きつ」のどちらが促音化したものなのか。「一」に比べ語例こそ少ないが、「吉」にも「一」と同じ呉音・漢音同定の困難さがある。このため、本稿では「一」「吉」を除外することとした<sup>7</sup>。

なお、同じようにカサタハ行の前で促音化する t 入声字であっても、「日（にち・じつ）」「発（ほつ・はつ）」のように下線部のような違いがあるものは紛らわしくない。「質（しち・しつ）」では「しち」が借金の担保、「しつ」が性質を表すという意味の違いから、「質素」は「しつ」が促音化したものだと判断できる。

### 3. 2 字音調査

3. 1 で得られた漢字の字音調査は、現代語については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を NLB で検索し、抽出された字音語を呉音読みと漢音読みとに分けて、それぞれの（異なり）語数を比較する。例えば、「客」を含む字音語を検索する場合、「\*客」のように、調べたい漢字の前にアスタリスク「\*」を付けると、「客観」「顧客」「観客」...のように BCCWJ で使われている語が抽出される。アスタリスクは半角でも全角でもよい。訓読語（例：「上 うえ」）は除き、重箱読み（例：客間）、湯桶読み（例：相客）なら、調査している字が字音で読まれているものは取り上げる。同形語に音読と訓読の両方がある場合（例「上 上手：じょうず、うわて」）は、字音語もあると見なし、呉音「じょう」1 と数える。

なお、NLB は、各語の頻度情報も知らせてくれるが、中世の日本語を調べるのに用いる『落葉集』は辞書であり、頻度を得られないため、ここでは、呉音読みをする語が異なりで何語あり、漢音読み

<sup>6</sup> 「宮 ぐう」を慣用音でなく、呉音とする辞書に『漢辞海』がある。本稿では見送ったが、「ぐう」を呉音「くう」の漢語連濁から生まれ、定着した字音と考えれば、呉音とすることが可能であろう。

<sup>7</sup> 常用漢字音訓表では、「一（いつ）」の語例に「一般」を、「罰（ばつ）」の語例に「罰金」を載せている。これに従い、「いっ」「ばっ」を「いつ」「ばつ」の例として扱う（石山 2023 p.47）方法もあるが、常用漢字表の語例の出し方は呉音か漢音かを区別するというよりも、現代日本語を使用する人々にとってわかりやすくすることに重点が置かれているかもしれない。

をする語が何語あるかを比較するにとどめる<sup>8</sup>。なお、NLB で抽出した字音語の字音を確認する必要があるときは、『明鏡国語辞典 第三版』および『日本国語大辞典』（以下、『日国』）を参照した。

室町時代の字音調査には、『落葉集』を用いた。『落葉集』は、漢語や漢字の読み方を知るためにイエズス会が編集した辞書で、1598年に長崎で刊行された。音から引く「本篇」、訓から引く「色葉字集」、字形から引く「小玉篇」から成る。漢字字母約 2200。図 4 と 5 に「本篇」から「客」の例を示す。

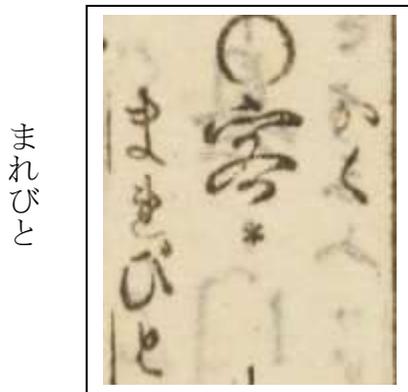


図 4 「客 (かく)」『落葉集』「本篇」 Gallica

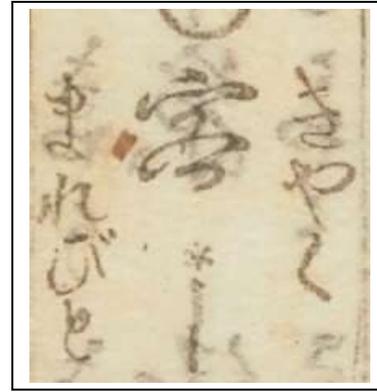


図 5 「客 (きやく)」『落葉集』「本篇」 Gallica

図 4、5 は、『落葉集データベース (試行版) v2025-06』からオンラインで閲覧できるパリ国立図書館本 (Gallica) の画像である。『落葉集』については、このデータベース、小島 (1978) の総索引 (ローマ本の影印)、広島大学の「キリシタン版『落葉集』熟語熟字部分 第一版」を相補的に利用した。こうして、現代語と中世の日本語それぞれで、呉音・漢音のどちらが多いかを判定した。

### 3.3 初出例、語誌

使われている字音語について、『日国』の初出例を参照し、近代新造語を特定した。また、その語の語誌があれば、参考にした。

このようにして現代語で呉音のほうが漢音より優勢な漢字に室町時代からどのような変化があったのかを見ていった。

## 4 調査結果

### 4.1 研究課題1の答え

RQ1：現代語で呉音読みが漢音読みより多い字には、どのようなものがあるか

表 1 の C に当てはまる字ごとにその字を含む語を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」BCCWJ を NLB で検索し、その字を音読する語を呉音読みと漢音読みとに分けた結果、呉音読みのほうが漢音読みより多かったのは、次の 30 字である。字は徳弘 (2008) の「よく使う」順に並べてある。また、字音は現代仮名遣いで示した。

日	大	上	今	自	京	体	目	代	九
度	道	相	世	木	無	右	役	音	台
情	客	歳	末	存	香	図	読	病	財

<sup>8</sup> NLB は本来、動詞や名詞などの共起関係や文法的振る舞いを調べられるのが最大の特徴だが、本調査では現代の字音語を抽出する目的で使用した。これも NLB のひとつの活用法であろう。

また、漢音読みの語数が呉音読みの語数を上回るのは次の74字だった。

会	人	生	行	金	力	地	間	下	明
女	対	主	正	言	回	万	定	家	文
発	名	気	化	公	外	業	平	男	物
口	成	都	工	直	有	反	神	性	治
命	聞	食	期	白	権	声	赤	解	建
頭	青	着	形	流	若	夏	清	経	星
望	西	歩	去	久	兵	武	修	供	然
殺	質	遠	静						

呉音読みの語数と漢音読みの語数が拮抗しているのが次の1字である。

由

限られた字数ではあるが、現代語でよく使われる98字中、漢音読みの多い字(74字)が呉音読みの多い字(30字)をはるかに上回っており、近代は呉音から漢音への交替が多く見られるという先行研究と呼応する結果となっている。

次に、呉音読みが漢音読みより語数の多い字をもう少し詳しく見ていきたい。表2は、上に挙げた30字の呉音、漢音、唐宋音、それぞれの語数を示している。ここに見える唐宋音「京 きん」は常用漢字音外だが、BCCWJに「南京豆」「南京錠」など唐宋音で読む語が出ているので▽を付し、その字の使われ方の全体像を知るために、表2に載せておいた。表2の漢字30字が研究課題1の答えである。なお、慣用音はこの30字にはないので、欄を設けていない。

表2 現代語(BCCWJ)で呉音読みの語が漢音読みの語より多い漢字30字(98字中)

No.	漢字	呉音	漢音	唐宋音	呉音数	漢音数	呉音・漢音数	唐宋音数
1	日	にち	じつ	NA	98	55	3	NA
2	大	だい	たい	NA	181	132	18	NA
3	上	じょう	しょう	NA	196	1	2	NA
4	今	こん	きん	NA	24	1	3	NA
5	自	じ	し	NA	173	5	0	NA
6	京	きょう	けい	きん▽	18	3	1	6
7	体	たい	てい	NA	180	8	2	NA
8	目	もく	ぼく	NA	72	0	2	NA
9	代	だい	たい	NA	121	6	1	NA
10	九	く	きゅう	NA	12	8	1	NA
11	度	ど	と	NA	96	2	0	NA
12	道	どう	とう	NA	65	1	1	NA
13	相	そう	しょう	NA	85	19	0	NA

14	世	せ	せい	NA	56	47	5	NA
15	木	もく	ぼく	NA	42	33	0	NA
16	無	む	ぶ	NA	222	22	1	NA
17	右	う	ゆう	NA	21	4	0	NA
18	役	やく	えき	NA	81	21	0	NA
19	音	おん	いん	NA	127	7	5	NA
20	台	だい	たい	NA	65	14	2	NA
21	情	じょう	せい	NA	95	1	0	NA
22	客	きゃく	かく	か▽	34	7	30	0
23	歳	さい	せい	NA	19	2	0	NA
24	末	まつ	ばつ	NA	51	0	1	NA
25	存	ぞん	そん	NA	19	12	7	NA
26	香	こう	きょう	NA	45	1	0	NA
27	図	ず	と	NA	58	8	0	NA
28	読	どく	とく <sup>9</sup>	NA	55	0	2	NA
29	病	びょう	へい	NA	117	1	0	NA
30	財	ざい	さい	NA	39	2	0	NA

「呉音数」欄：黄色は呉音が漢音の3倍以上 灰色は1倍以上3倍未満（現代語で「綱引き中」）

「漢字」欄 太字：黒沢（2024）で取り上げたもの 青字：第5節で詳述 ▽常用漢字音外

さて、どちらが多いかということだけでは、それがどのくらい偏ったものかはわからない。そこで、石山（2023、2024）に倣い、ひとつの指標として、片方がもう片方の3倍の語数を持つ場合に「偏りがある」と言うこととした。30字中24字は呉音読みが漢音読みの3倍以上であり、しかもそのうち呉音の比率9割以上の字が16字を占める。「上、自、体、目、代、度、道、無、音、情、歳、末、香、読、病、財」である。呉音が無標の字音だと言ってもよいだろう。「上 じょう」「自 じ」「体 たい」「道 どう」「無 む」など、おそらく、多くの人にとって、字を見るとすぐに思い浮かべる字音になっているのではないだろうか。

表では、呉音読みが漢音読みの3倍以上ある字の呉音読みの語数を黄色でハイライトしてある。片方が0の場合、本調査では用例数10以上のものを対象としているので、もう一方が10以上ということになる。この場合も呉音読みの語数を黄色で示した。一方がもう片方の1倍以上3倍未満の字の呉音数は灰色で示す。現代語ではRQ3の呉音漢音が綱引きしている字としてこの6字（目大九世木存）を挙げることができる。

なお、23番の「客」は、呉音と漢音どちらでも読まれる語の数が30で、漢音読みの7よりもはるかに多い。「客」は漢音から呉音へという流れに乗ってはいるけれども、呉漢両方の読みが国語辞典に記載されているという点からは、まだ交替の完了していない字であると言える。（第5節 図6 参照）

<sup>9</sup> 「句読点」の「とう」は非入声、「読書」の「どく」は入声の字音なので、対にしない。

## 4. 2 中世と現代

RQ2 : 「漢字音の一元化」(屋名池 2005) は、どのくらい進んでいるのか

次に、現代語で呉音読みが多い 30 字について、中世の漢字字書『落葉集』における漢字音の使われ方を表 3 に示す。字音は『落葉集』の字音に即した歴史的仮名遣いで書いてある。(なお、それ以降は現代語と各時代のデータがどちらも出てくるため、現代仮名遣いに統一する。)

表 3 中世の日本語(『落葉集』の「本篇」)における 30 字の字音と熟語数

	字	呉音	漢音	呉音数	漢音数		字	呉音	漢音	呉音数	漢音数
1	日	にち	じつ	32	67	16	無	む	ぶ	86	34
2	大	だい	たい	147	87	17	右	う	いう	42	3
3	上	じやう	しやう	81	44	18	役	やく	えき	21	2
4	今	こん	きん	19	0	19	音	をん	いん	15	18
5	自	じ	し	55	1	20	台	だい	たい	10	21
6	京	きやう	けい	16	4	21	情	じやう	せい	22	11
7	体	たい	てい	39	8	22	客	きやく	かく	6	31
8	目	もく	ぼく	20	5	23	歳	さい	せい	15	2
9	代	だい	たい	28	6	24	末	まつ	ばつ	9	6
10	九	く	きう	7	9	25	存	ぞん	そん	13	0
11	度 <sup>10</sup>	ど	と	17	4	26	香	かう	きやう	35	14
12	道	だう	たう	89	18	27	凶	づ	と	8	2
13	相	さう	しやう	44	9	28	読	どく	とく <sup>11</sup>	13	0
14	世	せ	せい	29	15	29	病	びやう	へい	53	0
15	木	もく	ぼく	16	28	30	財	ざい	さい	17	0

呉音数が黄色：呉音が漢音の 3 倍以上、または漢音数が 0。呉音に偏っている。

漢音数が緑色：漢音が呉音の 3 倍以上、または呉音数が 0。漢音に偏っている。

字音数が灰色：一方がもう片方の 1 倍以上 3 倍未満。(中世「綱引き」していた字 12 字)

表 4 現代語で呉音読みの方が多い 30 字種を中世語での偏り方と比較する

	呉音で読む語数が漢音で読む語数の	NLB 字数	落葉集 字数
A	3 倍以上	24	17
B	1 倍以上 3 倍未満	6	7
C	1 倍未満	NA	6
	計	30	30

<sup>10</sup> 「支度」の「たく」は入声、「温度」「法度」の「ど・と」は非入声なので、「ど・と」のみを対照する。

<sup>11</sup> 「句読」の「とう」は非入声、「読書」のドクは入声で異なるカテゴリーの字音なので、対にしない。

この30字の中ではAに属す漢字の数が『落葉集』の17字からNLBの24字に増加している。その限りでは、字音の偏りは中世にも見られたが、それが現代になって一層進行していると言えそうである。これが現時点でのRQ2への概括的な答えだが、漢音優勢の74字と呉漢半々の1字も調査したあとでこそ、もっと確かなことが言えるだろう。また、現代からでなく、中世から見てどうなのかを見ることも必要であろうが、ともに今後の課題としたい。

表2の30字を表3『落葉集』での偏り方と組み合わせたものが表5-1である。

表5-1 呉音と漢音に偏りがあるのはどんな字か 現代と中世

		『落葉集』 中世		
		3倍以上	1倍以上 3倍未満	1倍未満
NLB	3倍以上	今 自 京 体 目 代 度 道 相 右 役 歳 囙 読 病 財	上 無 情 末 香	音 台 客
現代	1倍以上 3倍未満	存	大 世	日 九 木

太字：黒沢（2024）で取り上げた字 青字：第5節で詳述

表の各欄にある字は、黒沢（2024）で示した類型とどのように関連しているだろうか。

表5-2 類型1 強い呉音が勢力を維持 中世・現代とも呉音に偏り

		『落葉集』 室町				
		3倍以上	1倍以上 3倍未満	1倍未満		
NLB	3倍以上	今 自 京 体 目 代 代 度 道 相 右 役 役 歳 囙 読 病 財	上 無 情 末 香	音 台 客		
現代	1.3倍未満	存	大 世	日 九 木		

文中に示した字音の変化の例

「自」  
『落葉集』 NLB  
55 > 1 → 173 > 5  
呉音 漢音 呉音 漢音

表5-2の赤い円で囲んだ16字は現代も室町時代も呉音読みが漢音読みの3倍以上ある字である。強い呉音はその勢いを保っている。多数派が多数派のままである。これが類型1である。

例：「自」55 > 1 → 173 > 5。「代」28 > 6 → 121 > 6。「度」17 > 4 → 96 > 2。「相」44 > 9 → 85 > 19。

なお、赤い円の下欄の「存」は、『落葉集』では「存分」「存命」「存念」など、呉音「ぞん」のみだったのが、NLBでは「既存」「存続」「存立」など漢音「そん」で読む語や「共存」「現存」のように「ぞん」でも「そん」でも読む語が現れ、呉音が絶対多数派ではなくなっている。そして、現代は「綱引き」中と呼べる状態にある。中世「漢字音の一元化」状態にあるかに見えた字が現代ではそうではなくなった例である。「ある時点での漢字音の一元化」は必ずしも字音の最終段階であるとは言えないし、一元化が過去から現代の方向に向かって進んできたとはばかりは言い切れないように思われる。

表 5-3 類型 2 少数派漢音も中世は一定の力を持っていたが、現代は多数派呉音が勢力を拡大／維持

		『落葉集』 室町										
		3倍以上					1倍以上 3倍未満		1倍未満			
NLB	3倍以上	今 代 役 財	自 度 歳	京 道 囧	体 相 読	目 右 病	上 情 香	無 末	音 客	台		
	現代 1.3 倍 以 未 上 満	存					大 世		日 木	九		

表 5-3 の緑で囲んだ 7 字は、中世、漢音も一定数使われており、「綱引き」していた 12 字の一部である。偏りは大きくなかったが、呉音が多数派だった。その呉音が勢力を拡大して現代漢音との間に 3 倍以上の差をつけ、一元化に近づいたのが上段の 5 字（上 無 情 末 香）である。下段の 2 字（大 世）は、現代も呉音がやや多数を維持しているが、差は縮んでいる。この二者が類型 2 である。

例：「上」81 > 44 → 196 > 1、ほとんど「じょう」に一元化した。類例：「道」89 > 18 → 65 > 1。「無」86 > 34 → 222 > 22 へ。「情」23 > 11 → 95 > 1「香」35 > 14 → 45 > 1 これらは中世、少ない方の漢音も一定数使われていたが、多数派が少数派を飲み込み、現代は大きく差が開いて、偏りが増した字だと言える。

表 5-4 類型 3 中世、漢音の方が多かったが、現代は呉音が勢力を拡大し、逆転

		『落葉集』 室町										
		3倍以上					1倍以上 3倍未満		1倍未満			
NLB	3倍以上	今 代 役 財	自 度 歳	京 道 囧	体 相 読	目 右 病	上 情 香	無 末	音 客	台		
	現代 1.3 倍 以 未 上 満	存					大 世		日 木	九		

表 5-4 の青い円で囲んだ字は、中世、漢音のほうが多く使われていた字が現代は逆転して呉音に偏っている（音 台 客）か、呉音の方が多くなっている（日 九 木）ものである。これが類型 3 である。

例：「音」15 < 18 → 127 > 7。「台」10 < 21 → 65 > 14。「日」32 < 67 → 98 > 55。「木」16 < 28 → 42 > 33。なお、「客」を除く 5 字は中世「綱引き」していた字でもある。次節では、逆転の度合の高かった例として「客」の字音の推移を詳しく見ていきたい。

## 5 「客」：「かく」から「きゃく」へ

### 5.1 『落葉集』とBCCWJ(NLB)を比較する

中世の字書『落葉集』の「本篇」には、「客」は「かく」と漢音で読む熟語が 31 載せられており、呉音読み 6 語に比べ漢音に偏っていた。しかし、現代では「かく」への一元化が進んだのではなく、逆に少数派だった「きゃく」が大幅に増加している、字音の変化は多数派が少数派を飲み込んで同じ方向へ進むものとは限らないのだろうか。

現代の BCCWJ (NLB による検索) では表 2 に示したように「きゃく」と呉音で読む語 34 に対して、「かく」と読む語は 7 語なので、この二者だけを見ると、大きく「きゃく」に偏っていることになる。だが、同形語で「きゃく」とも「かく」とも読むとされる語が 30 に及び、現代の国語辞典に載っているという点からは、はっきりと「きゃく」に座を明け渡したとは言えない。つまり、「客」は呉音読み「きゃく」が増えてはきているが、漢音「かく」と共存状態、綱引き状態が続いているようだ。

冒頭で見たように、明治期の小説や随筆に「客観 (かくくわん)」「乗客 (じょうかく)」とルビが打たれていることにも、近代語の増える近代初頭までに決着がついていない様子が見てとれる。この字は、呉音「きゃく」への「漢字音の一元化」には、まだ距離があるのだろうか。

『落葉集』「本篇」には「客」を字音で読む熟語が 37 載っているが、そのうち呉音「きゃく」6 に対して、漢音「かく」で読むものが 31 に及ぶ。漢音読みするものが呉音読みするものの 5 倍以上と、大きく漢音に偏っている。これを現代語と比較したのが図 6 である。

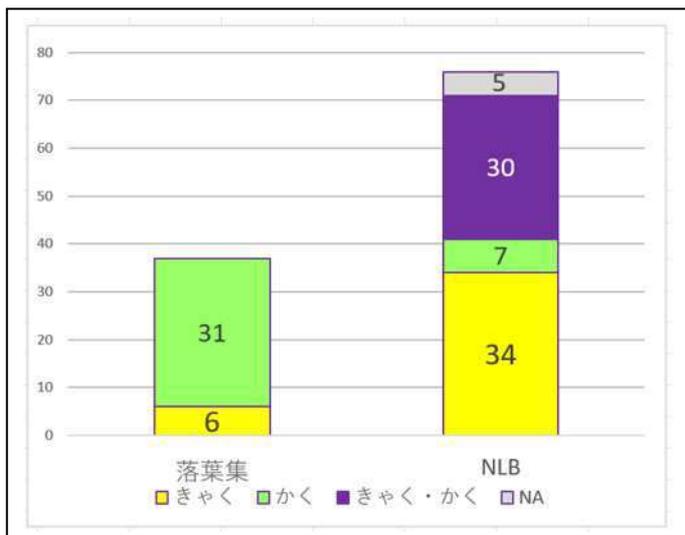


図 6 「客」：中世と現代で字音ごとの語数を比べる NA：国語辞典に立項されていない語

図 6 の黄色の部分が呉音「きゃく」で読む語で、現代語 (NLB) では

客 客席 接客 来客 客層 客商売 上客 千客万来 客間 \* 相客\*\*

など 34 語である。「客間\*」は音+訓の重箱読み、「相客\*\*」は訓+音の湯桶読みをする混種語だが、本調査では混種語も「客」を字音で読むものは数えている。緑色の 7 語が漢音「かく」で読む語で、

旅客機 旅客船 俠客 遊客 過客 騷客 酒客

である。「過客 (くわかく)」 (=旅人) は『奥の細道』(1693-94 頃) の「旅立」に

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也

とあることを思い出す人も多いだろう。現代の日常的な話し言葉ではない。だが、高校の古文で習う

といった経験を通じて、現代の私たちの言語資源の一角に存在すると言うことはできるだろう。

紫色の部分が「かく」とも「きやく」とも読む語で、『日国』に呉漢両方の読みでそれぞれ立項、またはどちらか一方の見出しにもう一方の読みが併記してあれば、ここに入れた。

顧客 客観 観客 乗客 旅客 客室 刺客 客車 客員 賓客 主客...

など 30 語ある。この呉音漢音併記の語中、私たちが「ああ、カクともキヤクとも読むなあ」と思えるのは、おそらく「旅客」と「刺客」ぐらいではないだろうか。「顧客」を「こかく」、「客員」を「かくいん」と読むことは、今ではなさそうである。それが『明鏡国語辞典』第三版に載っているのは、少し古い明治時代の日本語では、そう読んでいたし、辞書はそれを反映しているということだろう。

さて、それでは、「客」の字音がどのように推移してきたのかについて、中世から続く語（5. 2）と近代の新造語（5. 3）に分けて見ていきたい。

## 5. 2 中世から続く語

### 5. 2. 1 「客」：中世から現代まで続けて使われている語と字音の変化

『落葉集』で中世の「客」を字音で読む語は 37 語あるが、廃語が多く、呉音読みの 5 語、漢音読みの 24 語は『明鏡』には載っていない。もともと「かく」で読むものが多かったので、廃語になったのも「かく」が多く、ここでまず古い漢音読みの字音語ががくと減った。現代も『明鏡』に見出しとして載っているのは表 5 の 8 語である。古語も多く載せる『日国』ではなく、より現代語中心の『明鏡』にも立項されている語を取り上げたい<sup>12</sup>。

表 5 「客」：中世から現代まで続けて使われている語と字音の変化

	語	落葉集	明鏡	字音の変化
1	珍客	ちんかく	かく・きやく	漢→呉漢
2	旅客	りよかく	かく・きやく	漢→呉漢
3	客舎	かくしや	かく・きやく	漢→呉漢
4	客船	かくせん	かく・きやく	漢→呉漢
5	客席	かくせき	きやく	漢→呉
6	客人	きやくじん	きやく	なし
7	遊客	ゆうかく	かく	なし
8	賓客	ひんかく	かく・きやく	漢→呉漢

この 8 語中、字音の交替があったのは 6 語である。

かく → かく・きやく 5 語 珍客 客舎 客船 賓客

かく → きやく 1 語 客席

変化のなかったのが「遊客（かく）」「客人（きやく）」の 2 語だった。この 8 語中 5 語が「かく」を残しながら「きやく」が増えたということである。

では、それから 400 年余りのどの時期に「きやく」優勢への交替が起こったのだろうか。中世から

<sup>12</sup> 『日国』には「客愁」「行客」「客来」なども立項されている。

近代初頭にかけての辞書 8 種類（表 6）に『明鏡国語辞典』第三版を加えて 6 語の字音を追った。

表 6：「客」：中世から現代まで続けて使われている語の字音調査をした辞書（近世初頭まで）

	種類	辞書名	写本 刊本 活版	西暦	和暦	使用した 電子化資料の 所蔵
1	国語	文明本節用集/雑字類書	写	—	室町中期	国会図書館
2	漢字	落葉集	刊	1598	慶長 3 刊	国文学研究資料館 学術情報ポータル他
3	対訳	日葡辞書	活	1603-04	慶長 8-9 刊	—
4	国語	和漢音釈 書言字考 合類大節用集	刊	1717	享保 2 刊	早稲田大学
5	国語	江戸大節用海内蔵カクイダラ	刊	1861	文久 1 序	国文学研究資料館
6	対訳	和英語林集成 第 3 版	活	1886	明治 19 刊	明治学院大学
7	対訳	和英大辞典（ブリック）	活	1896	明治 29 刊	国会図書館
8	対訳	日台大辞典	活	1907	明治 40 刊	国会図書館

### 5. 2. 2 「珍客」 ちんかく・ちんきやく → 江戸期 ちんきやく

「珍客」は中世から「きやく」が出ているが、「かく」もあった。江戸、近代初めの辞書では「きやく」だけになっているので、江戸期には「きやく」に落ち着いたようである。ただ、現代の『明鏡』は「かく」も併記している。やや古い日本語の字音として「ちんかく」も認めているということであろう。（表中 黄色：呉音、緑：漢音、紫：呉音と漢音。以下同じ）

表 7 「珍客」

	室町中期	1598	1603	1717	1861
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節 用海内蔵
	きやく	かく	かく・ きやく	NA	きやく
	1886	1896	1907	2021	
	ヘボン和 英語林集 成	ブリック 和英大辞 典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
	NA	きやく	きやく	かく・ きやく	

### 5. 2. 3 「旅客」 りよかく → りよかく・りよきやく 時期不詳

「旅客」の読みは 1907 年刊の『日台大辞典』まで一貫して「かく」であり、『明鏡』で「かく・きやく」となっている。1907 年以降に「きやく」が現れると思われるが、その時期は特定できない。

表 8 「旅客」

	室町中期	1598	1603	1717	1861
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節 用海内蔵
	かく	かく	かく	かく	かく
	1886	1896	1907	2021	
	ヘボン和 英語林集 成	ブリック 和英大辞 典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
	かく	かく	かく	かく・ ぎやく	

5. 2. 4 「客舎」 かくしゃ → かくしゃ・きやくしゃ 時期不詳

「宿屋」を意味する「客舎」は『落葉集』以外、中世から近世にかけての辞書に見られず、『落葉集』および近代の 2 辞書では「かくしゃ」としている。『明鏡』で「かく・きやく」となるので、『日台大辞典』以降、おそらく 20 世紀の間に交替期があると思われる。

表 9 「客舎」

	室町中期	1598	1603	1717	1861
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節 用海内蔵
	NA	かく	NA	NA	NA
	1886	1896	1907	2021	
	ヘボン和 英語林集 成	ブリック 和英大辞 典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
	かく	かく	かく	かく・ ぎやく	

客舎：宿屋

5. 2. 5 「客船」 かくせん → 1886? きやくせん

表 10 「客船」

	室町中期	1598	1603	1717	1861
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節 用海内蔵
	NA	かく	かく	NA	NA
	1886	1896	1907	2021	
	ヘボン和 英語林集 成	ブリック 和英大辞 典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
	ぎやく	ぎやく	ぎやく	かく・ ぎやく	



## 5. 2. 8 明治・大正・昭和の言語資料で字音の交替時期を特定する

ここまでの調査でわかったのは、「珍客」は近世、「客船」は近代に「きゃく」が現れているということぐらいで、「旅客」「客舎」「賓客」は近代以降、「客席」については近世以降だろうとまでしかわからなかった。ここで用いた辞書は近代初頭までのものであるが、「客」の場合、それだけでは「きゃく」出現・替の時期がはっきりしないようだ。そこで、まず、『日本語歴史コーパス (CHJ)』を資料として追加した。ただ CHJ では主に明治・大正までしかわからないため、昭和の資料として、NHK のアクセント辞典 4 種を加えてみた。1943 年刊行の初版、1951 年版、1966 年版、1985 年版の 4 種であり、1985 年版以外は国立国会図書館デジタルコレクションを利用した。NHK の発音アクセント辞典には、そのときの口語として標準的と認められた発音が載っている<sup>13</sup>。やや古い書き言葉も守備範囲とする国語辞典より音声言語の実態を反映していると考えられる<sup>14</sup>。

中世から使われてきた字音語のうち、字音に変化のあった 6 語は、明治以降、どのように読まれてきたのだろうか。明治・大正の使用実態がうかがえる資料として、「日本語歴史コーパス (CHJ)」、次に昭和になってからの発音がわかる資料として、NHK の発音アクセント辞典を調査してみた。

表 13 にその結果を示す。CHJ の時代 (明治・大正期) は「かく」がかなり一般的に使われていたことがわかった。また、アクセント辞典によって、おおよその交替時期が明らかになった。

表 13 「客」：中世から現代まで続けて使われている語の明治・大正・昭和の字音

		CHJ ルビ		NHK アクセント辞典				キヤク中心になった時期など
		カク	キヤク	1943	1951	1966	1985	
1	珍客	2	7	キヤク	キヤク	キヤク	キヤク	江戸
2	旅客	41	15	カク・キヤク	カク・キヤク	カク・キヤク	カク・キヤク	現代でもカクあり
3	客舎	5	5	NA	NA	NA	NA	交替未完了
4	客船	3	1	キヤク	キヤク	キヤク	キヤク	明治
5	客席	0	2	キヤク	キヤク	キヤク	キヤク	明治・大正
6	賓客	8	3	NA	キヤク	キヤク	キヤク	昭和前半

「珍客」は CHJ でもすでに「きゃく」が「かく」より多く使われており、昭和のアクセント辞典 4 種には、すべて「きゃく」が使われている。古い辞書調査でも江戸末期から近代初頭にかけての辞書に「きゃく」が載っていることから、江戸期に「ちんきゃく」が浸透していた可能性が高い。

「旅客」は CHJ でも「かく」が「きゃく」の 3 倍近く使われ、昭和のアクセント辞典にはすべて「か

<sup>13</sup> NHK のアクセント辞典初版は放送現場で使うアクセントのよりどころがほしいという声から作られた (2019 年版まえがき) ことから「放送にふさわしいか」を判定した結果が反映されている。同じアクセント辞典でも、三省堂の『明解アクセント辞典』『新明解日本語アクセント辞典』の採録基準は少し異なる。俳優や朗読家にも活用できることを念頭に、現代日本語の話し言葉に加え、文章語に用いられる雅語や漢語、俗語も数多く収録している (三省堂 辞書ウェブ編集部 2024)。本稿でアクセント辞典を調査する目的は、標準的な口語に字音交替が起こった時期を絞り込むことであるため、NHK の辞書に資料を統一した。

<sup>14</sup> 例えば『明鏡国語辞典 第三版』の凡例には、方針として「基本的な現代語を中心に」するが、「現代語だけでなく、古語も適宜収録する」とある。

く・きゃく」のどちらも載っている。それは、最新の『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2019)でも変わっていない。現代でも「りよかく」「りよきゃく」双方が生きている言葉である。

「客舎」はCHJでは「かくしゃ」と「きゃくしゃ」が半々に使われているが、昭和のアクセント辞典には載っていない。宿屋という意味の文語であり、明治・大正時代には「きゃく」も使われるようになっていたことまでがわかった。「きゃく」に交替する前に言葉自体が使われなくなった例か。

「客船」は、CHJでは「かくせん」のほうが多いが、昭和のアクセント辞典はすべて「きゃくせん」を採用している。また、古い辞書の調査では明治初頭の対訳辞書3種がいずれも「きゃくせん」のみ記載している(表10)。それを考え併せると、明治期に「きゃくせん」への交替が進んだようである。

「客席」は、数は少ないが、CHJに「きゃくせき」が2例見える。昭和のアクセント辞典は4種とも「きゃくせき」である。明治初期の3冊の辞書には記載がない(表11)が、CHJの例から、おそらく明治・大正期に「きゃくせき」に交替していったものと推測される。

「賓客」は、CHJで「ひんかく」のほうが「ひんきゃく」より多い。1943年のアクセント辞典には記載がないが、1951、1966、1985年のアクセント辞典には「ひんきゃく」だけが載っている。そうしたことから、交替時期は昭和前半と見たらよいであろうか。

このように、交替時期は語によって江戸期から昭和前半までの長い幅のどこかに位置するようである。「客」が多く「きゃく」と読まれるようになったとは言え、まだ綱引きの余韻も冷めやらぬ時期にあるようだ。

### 5.3 「客」: 近代の新造語

ここからは、「客」の字を含む**近代の新造語**で呉音と漢音がどのように使われているか見てみたい。まず、BCCWJ(NLB)で抽出した「客」を含む76語を『日国』の初出時期によって分けると、次のような分布になる。下記で「辞書」というのは、『日国』『明鏡』の一方または両方を指す。

- (1) 「かく・きゃく」の一方または両方の初出例が 1867 年以前  
42 語 客 旅客 主客 正客 過客 千客万来...
- (2) 「かく・きゃく」の一方の読みが辞書にあり、かつ、その初出例が 1868 年以降  
11 語 接客 客層 客間 客引き ... ⇒ 「近代語 1」
- (3) 「かく・きゃく」の両方の読みが辞書にあり、かつ、両者の初出例が 1868 年以降  
10 語 客観 観客 乗客 客室 ... ⇒ 「近代語 2」
- (4) 国語辞典に見出しがないか、用例がなく、初出時期が特定できない  
13 語 見出しなし 華客  
見出し:「きゃく」 集客 客演 用例なし  
見出し:「かく・きゃく」 顧客 論客「きゃく」の用例なし 常客「かく」の用例なし

このうち、(2)を「近代語 1」、(3)を「近代語 2」と呼ぶ。(4)には、「顧客」「論客」など、近代語らしいものがあるが、用例と初出がないため、そう呼ぶことができない。ここからは、(2)と(3)の近代語、つまり明治以降に新しく造られた21語について見ていく。

読みが「きゃく」だけの「近代語 1」は11語ある。「客商売」「接客」「客層」などの字音語のほか、「客間」「客種(だね)」「客筋」「客扱い」「客引き」などの混種語(ここに挙げたものは「客」のあとに和語が続く重箱読み)がある。

これらの語で、初出の時点で読みが「きゃく」だけだった理由は何だろうか。前節で見たように、明治大正期の「客」は、「かく」と読まれることがかなり一般的だったのに、なぜ、という疑問である。それは、「客」が単独では早くから「きゃく」と読まれていたためではないかと思われる。単独での「客」には、①訪ねてくる人(狂言 室町末～近世初)、②代価を払って品・労力などを求めに来る人(1678)、③旅をしている人(『和玉篇』15C 後)などの意味で用いられてきた(括弧内は初出)。近代語1の11語は、「客」がすべてこの①～③のいずれかの意味で用いられている。

一方、近代語2は、「きゃく」だけでなく、「かく」とも読む。

(4)「かく」が先行して出現 8語 客観 観客 乗客 客員 船客 客土 政客 訪客

(5)「きゃく」が先行して出現 2語 客室、客体

最新の『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2019)では、このすべてを「きゃく」とだけ読むが、「かく」との交替はいつごろ起こったのか。

筆者がこれまで調査した漢字には、近代語は交替した新しい方の字音で造られるものが多くあった。例えば、「物」は主な字音は呉音「もつ」から漢音「ぶつ」に交替したが、『日国』初出が明治以降の語の読みは「ぶつ」が67語中64語を占めていた(黒沢2022)。

例：博物学 鉱物 農産物 有機物 唯物 物資...

あるいは、「言」字音語では、新しい漢音読みで「げん」と読むものが35/36語であった(黒沢2023)。

例：証言 提言 言動 予言...

さらに、「日」字音語は、新しい漢音読みで「にち」と読むものが34/51語であった(黒沢2024)。

例：日射 日誌 日本酒 抗日...

ところが、本稿で調査した「客」の新造語は、新しいほうの呉音読みで「きゃく」と読むものが11/21語と約半数にとどまり、「かく・きゃく」両方の読みを持つものがやはりほぼ半数の10/21語である。つまり、近代になってもまだ優勢な字音の交替が完了していないのである。

ここで本稿冒頭に掲げた図2「客観」(かくくわん 漱石 1907)、図3「乗客」(じようかく 蘆花 1906)を振り返ってみたい。これらは、「かく」という読みが「きゃく」に先行した近代新造語の例である。

表14に(4)と(5)に挙げた「客」近代語10語(「かく」「きゃく」両方で読まれたもの)の『日国』初出年および現代の読み(明鏡2021、NHK発音アクセント新辞典2019)を掲げる。

表14 「かく」「きゃく」両方で読まれた「客」近代語2 初出と現代の読み

		漢音 かく 日国初出	呉音 きゃく 日国初出	明鏡 2021	NHKアクセ ント 2019
1	船客	1874～76	1894	かく・ きゃく	センキャク
2	乗客	1875～81	1886		ジョーキャク
3	客観	1878	1917		キャツカン
4	観客	1878～79	1913		カンキャク
5	客土	1888～89	1957		キャクド
6	政客	1897	1909		セーキャク
7	客員	1898	1925		キャクイン
8	客室	1904	1874～76		キャクシツ
9	客体	1908	1907		キャクタイ
10	訪客	1908	1909		ホーキャク

なお、「きゃく」だけでなく、「かく」も「吾等の外には一人の客（かく）もなかりき」（CHJ 1894）のように単独で名詞として使われていた。

1～10 は、「かく」の初出の古い順に並べてある。NHK の発音アクセント辞典（2019）では すべて「きゃく」で、現代語の標準的な発音は、間違いなく「きゃく」であることを示している。しかし、近代語を『日国』初出で見ると、表 14 の 10 語のうち 8 語は、まずは漢音読み「かく」でその語を使い始めたことがわかる。「きゃく」の用例が出てくるのは、20 世紀に入ってからが多い。8、9 だけが「きゃく」が先行している。

では、明治・大正期、どの程度「かく」が使われていたのか。それを表 15 にまとめた。ここで資料に JapanKnowledge の『明治文学全集』を加えた。これはコーパスではないが、ルビも含めて全文検索ができる。例えば、「船客」なら「せんかく かつ 船客」「せんきやく かつ 船客」のように漢字とルビを AND 検索にかけ、本文と照らし合わせることで、各例における「客」の読みが確認できる。表 15 の 10 語のふりがなを見てみると、「1 船客」「2 乗客」「3 客観」「6 政客」「8 客室」などは、「せんかく」「じょうかく」「かくくわん」「せいかく」「かくしつ」のように「かく」で読む例が多数派であることがわかる。

次いで、『日本語歴史コーパス（CHJ）』で見ると、「2 乗客」「3 客観」「4 観客」「5 客」などは、「じょうかく」「かくくわん」「くわんかく」「せいかく」のように「かく」を含むふりがなが大多数を占めている。この 10 語が使われた CHJ の資料は大正末の 1925 年までのものだが、1925 年の雑誌・新聞にもこの 4 語には主に「かく」が使われており、新しいからと言って「きゃく」が増えるわけでもない。「きゃく」のほうが多いのは「客室」1 語に過ぎない。これを見ると、近代に入って造られた言葉も、明治大正期は、「きゃく」でなく「かく」と読むのが一般的だったことがわかる。

表 15 明治文学全集と日本語歴史コーパス（CHJ）の「客」近代語 2

		かく 明治文学	きゃく 明治文学	かく CHJ	きゃく CHJ
1	船客	13	2	3	3
2	乗客	16	4	55	15
3	客観	10	2	59	2
4	観客	3	0	28	1
5	客土	0	0	0	0
6	政客	8	0	19	0
7	客員	4	0	2	0
8	客室	6	1	4	8
9	客体	0	0	0	0
10	訪客	0	0	2	0

では、この 10 語の「客」は、いつごろ「きゃく」が主な読みになっていったのだろうか。まず、表 16 の国会図書館デジタルコレクションにある近代の辞書から見ていく。この 10 語は近代になって造られた言葉なので、1886（明治 29）年の辞書には 3 語しか載っていない。「きゃく」の『日国』初出が早いと、それだけ辞書に「きゃく」が反映されるのも早い。例えば、「船客」の『日国』初出例は 1894

年だが、それに続くように 1896 年ブリックリー『和英大辞典』に「船客 (せんきゃく)」が載っている。「乗客」は 1886 年『日国』初出で、1907 年の『日台大辞典』に「じょうきゃく」が「じょうかく」とともに登場する。「客室」は 1874-76 年に『日国』初出例があり、やはり 1907 年の『日台大辞典』に「きゃくしつ」が出るといった具合である。

表 16 明治・大正・昭和 (1886~1941) の対訳辞書の「客」近代語 10 語

		ブリックリー-和英 1886	日台 1907	武信和英 1918	竹原和英 1928	武信和英 1941
1	船客	キャク	キャク	キャク	キャク	キャク ✓
2	乗客	NA	カク・キャク	キャク	カク・キャク	キャク ✓
3	客観	NA	カク	カク・キャク	カク・キャク	カク
4	観客	NA	NA	カク	カク	カク
5	客土	カク	NA	NA	NA	NA
6	政客	NA	NA	NA	NA	カク
7	客員	NA	カク	カク	カク	カク
8	客室	カク・キャク	キャク	カク	カク・キャク	キャク ✓
9	客体	NA	NA	カク	NA	カク
10	訪客	NA	NA	NA	NA	NA

しかし、一番右の 1941 年の辞書の時点で、「きゃく」だけ記載されているのは「船客」「乗客」「客室」の 3 語に過ぎない。その後、いつごろになれば残りの近代語は「きゃく」に落ち着いていくのだろうか。昭和になってからの書き言葉コーパスには、ほとんどふりがながふられなくなっていく。そこで、再び NHK の発音アクセント辞典を見てみた (表 17)。

表 17 昭和の発音アクセント辞典の「客」近代語 10 語

		NHK 1943		NHK 1951		NHK 1966		NHK 1985	
		カク	キャク	カク	キャク	カク	キャク	カク	キャク
1	船客	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク
2	乗客	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク
3	客観	カク カッ	キャッ	NA	キャッ	NA	キャッ	NA	キャッ
4	観客	カク	キャク	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク
5	客土	NA	NA	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク
6	政客	カク	NA	カク	キャク	カク	キャク	NA	キャク
7	客員	カク	NA	カク	キャク	NA	キャク	NA	キャク
8	客室	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク
9	客体	NA	NA	NA	キャク	NA	キャク	NA	キャク
10	訪客	NA	NA	NA	NA	NA	キャク	NA	キャク

すると、1943（昭和 18）年には、「1 船客」「2 乗客」「8 客室」は、すでに「きゃく」だけが記載されているが、これは 1941 年の武信の和英辞典と同じである。また、「3 客観」「4 観客」は「かく」と「きゃく」両方が載っている。だが、「6 政客」と「7 客員」は「せいかく」「かくいん」としか出ていない。それでも、明治大正期に比べると、「きゃく」が進出してきたことが見てとれる。

次に 1951 年の辞典になると、「3 客観」「4 観客」は「きゃっかん」「かんきゃく」だけに、そして 1966 年には「7 客員」も「きゃくいん」だけ、「かく」は「政客」に残るのみとなる。また、これまで対訳字書にもアクセント辞典にも出てこなかった「10 訪客」が「きゃく」で現れる。

さらに、1985 年の『日本語発音アクセント辞典（改訂新版）』になると、1 番から 10 番まですべて「きゃく」だけになっている。ついにこの近代新造の 10 語から標準的な現代語では「かく」がなくなるが、それは筆者自身の認識とも重なる。

こうして明治から昭和に至る言語資料によって「客」の字音の移り変わりを見てきたが、同じ辞書でも、国語辞典より発音アクセント辞典のほうに発行当時、音声言語で標準的にはどう言うかが反映されると考えられる。最後に、BCCWJ（NLB 検索）で得た「客」を含む 76 語の読みを『明鏡』第三版（立項されていない場合は『日国』第二版）と NHK の発音アクセント辞典（2019）とで比べてみよう。その結果を図 7 に示す。

NLB の「客」76 語中、『明鏡』（項目がなければ『日国』）では「かく・きゃく」が 30 語、「きゃく」が 34 語であるのに対して、アクセント辞典では、「かく・きゃく」が 5 語、「きゃく」が 48 語となる。それぞれの辞書で立項していない語は灰色で示している。

音声言語では、文字言語に先駆けて「きゃく」となった語が多い。「客観 観客 乗客 客室 客体 客員…」などがその例である。発音アクセント辞典（2019）で「かく・きゃく」となっているのは、「顧客 旅客 剣客 主客 客死」である。また、国語辞典とアクセント辞典で共通して「かく」としているのは「旅客機」「旅客船」「侠客」だが、「刺客」「食客」「（文人）墨客」については国語辞典で「かく・きゃく」とするのに対して、アクセント辞典では「かく」だけにしている。古い読み方で固定した語と捉えているようだ。

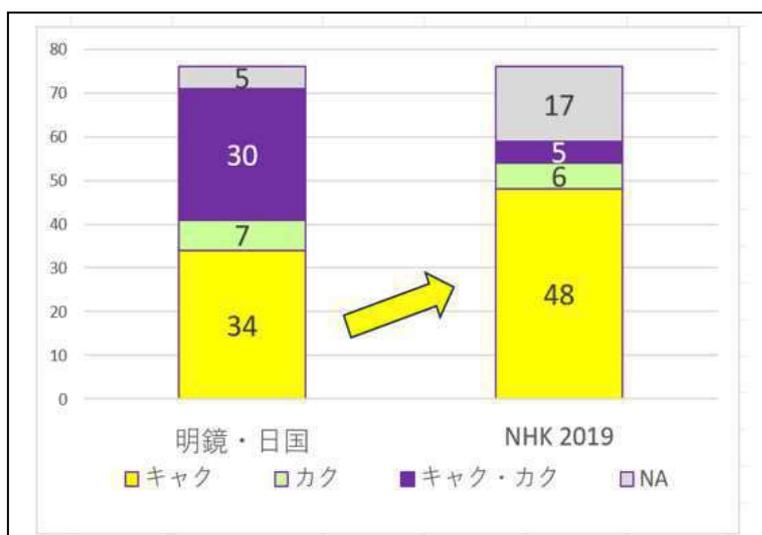


図 7 BCCWJ の「客」を国語辞典とアクセント辞典ではどう読むか

このように中世、主に漢音「かく」が使われていた「客」は「かく・きゃく」の時代を経て、「きゃ

く」に大きく偏っていきつつある。だが、現在でも「きゃく」にならない語がある。それは「旅客機」だが、「りよきゃつき」と言おうとすると、発音が難しいのに気がつく。「旅客」なら「りよきゃく」と言えるにも関わらず、そのあとに「き」を付けただけで言いづらくなってしまう。発音のしやすさ、しにくさということも、字音選択のひとつの要因となる場合があるのだろう。

## 6 まとめと今後の課題

### RQ3 二つの字音が共存・綱引きしている字にはどんなものがあるか

本稿で取り上げた、「現代語 (BCCWJ/NLB) で呉音読みのほうが漢音読みより多い」30字の範囲での答えは次の通りである。現代語では「日大九世木存」の6字(表2)、中世語では「日大上九世木無音台情末香」の12字(表3)が挙げられる。どちらかの字音がもう一方の字音より多いが3倍未満だという基準を用いた場合に、1音だけになってしまいそうな気配がそれほど濃くないと見なし、2音が、あるいは共存し、あるいは綱引きをしていると考えた。限られた漢字についての結果ではあるが、現代語のほうがその数が減っていることは、「漢字音の一元化」が進みつつあることを示しているように見える。

この30字の多くは中世すでに呉音が支配的あるいは多数派であり、現代も語数が増えただけでその形勢は変わらない字である。だが、差が拡大した字もある。また、中には、優勢な字音が逆転した字もある。後者は中世は漢音が優勢だったが、現代は逆転して呉音優勢となった。その中で、綱引きの過程を詳しく見た、一つの特徴的な例は「客」だろう。中世は漢音「かく」に偏り、現代は呉音「きゃく」優勢となったものの、その変化には長く時間がかかっている。中世から続く語の字音に交替のあった時期は、近代初頭までの辞書だけではわからない。『日本語歴史コーパス (CHJ)』や発音アクセント辞典を見ると、「きゃく」中心になった時期は語によって明治・大正・昭和などであることがわかる。

「客」近代語には、まず漢音「かく」で造られ、その後「きゃく」となったものが多い。資料に『明治文学全集』や近現代の和英辞典を加えて調査すると、「きゃく」中心になったのは昭和後半になってからだった。『明鏡国語辞典 第三版』(2021)には、表14~17の「客」近代語10語中、「船客」と「客室」以外には「かく」と「きゃく」両方の字音が記載されており、やや古い読みとして「かく」がそれほど遠くない過去に生きていたことを示している。「客」は漢音「かく」と呉音「きゃく」がある時期には共存し、綱引きをしてきたが、音声言語では、ごく最近になって、ようやく「きゃく」中心になってきている。音声言語(発音アクセント辞典)から見ると、「客」の「きゃく」一元化はかなり進んでいる。だが、国語辞典が文字言語をカバーするものだとすると、文字言語で「漢字音の一元化」に至るにはまだ多少距離があるように見える。

最後に、今後の課題として次のことを考えている。

- 1 主な字音が変化しない字、あるいは漢音から呉音に交替した字をさらに調べる。
- 2 字音の偏りがどのくらい進んでいるかについて、現代語で漢音優勢の74字の調査にも着手する。
- 3 変化の類型：本稿では主に表5-2、5-3、5-4の3つの類型を用いたが、74字の調査で、別の分け方がより適切になってこないかを確認する。
- 4 呉音・漢音という主だった字音がなぜ／どのように勢力を変えたかを考える。

## 参考文献

- 石山裕慈 (2023) 「『和英語林集成』第三版の漢字音についての一考察」『神戸大学文学部紀要』50, 27-48.
- 石山裕慈 (2024) 「『和仏小辞典』の漢字音——『和英語林集成』第三版との比較を通して——」『神戸大学文学部紀要』51, 1-20.
- 小川誉子美 (2020) 『蚕と戦争と日本語—欧米の日本理解はこうして始まった』ひつじ書房
- 大島英之 (2023) 「キリシタン版『落葉集』の漢字音について」『日本語学論集』19, 1-20.
- 大島英之 (2025) 「中世末に常用された漢字音—リスト作成の試み—」『日本語学論集』21, 14-41.
- 沖森卓也・肥爪周二編著 (2017) 『日本語ライブラリー 漢語』朝倉書店
- 黒沢晶子 (2011) 「中国語母語話者と入声音—『循環型社会をジゲンし』とは?—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.23, 137-145.
- 黒沢晶子 (2013) 「漢字音教材開発—入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか—」『日本語教育方法研究会誌』20-1.
- 黒沢晶子 (2015) 「漢字音教材開発—音符の活用—」『日本語教育方法研究会誌』22-1.
- 黒沢晶子 (2016) 「漢字音の長音教材—中国語母語話者と非母語話者を対象に—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.29, 147-157.
- 黒沢晶子 (2017) 「漢字音の清濁を何から見分けるか」『日本語教育連絡会議論文集』vol.30, 103-117.
- 黒沢晶子 (2018) 「音符は漢字音学習にどのぐらい活かせるか—カ・タ・ナ・ハ・マ行—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.31, 22-34.
- 黒沢晶子 (2019) 「常用漢字の字音を音符で見分ける—長さの違いはどこから来たか—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.32, 68-82.
- 黒沢晶子 (2020) 「中世から近代への字音の消長—「打」—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.33, 48-65.
- 黒沢晶子 (2021) 「中世から近代への字音の消長—「眠」—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.34, 51-62.
- 黒沢晶子 (2022) 「中世から近代への字音の消長—「物」—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.35, 121-136.
- 黒沢晶子 (2023) 「中世から近代への字音の消長—「言」—」『日本語教育連絡会議論文集』vol.36, 74-89.
- 国語学会編 (1976) 『国語史資料集—図録と解説—』武蔵野書院
- 小島幸枝 (1978) 『耶穌会板「落葉集」総索引』笠間書院 国文学研究資料館学術情報リポジトリ
- 小松英雄 (1971) 『日本声調史論考』風間書房
- 今野真二 (2012) 『日本語学講座第5巻『節用集』研究入門』清文堂
- 藤堂明保 (1957/1980a) 『中国語音韻論—その歴史的研究』光生館
- 藤堂明保 (1980b) 「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社
- 中澤信幸 (2011) 「呉音について」『日本語学』30-3 : 18-27.
- 中澤信幸 (2012) 「日本語の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』9 : 59-68.
- 中田祝夫 (1979) 『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引』勉誠社
- 中田祝夫 (2006) 『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引 影印篇・索引篇』勉誠出版
- 中田祝夫・小林祥次郎 (2006) 『改訂新版 書言字考節用集研究並びに索引』勉誠出版
- 沼本克明 (1986) 『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 沼本克明 (2014) 『帰納と演繹とのほごまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず—字音仮名遣い入門—』汲古書院

- 飛田良文 (1968) 「明治大正期における漢音呉音の交替」『近代語研究』 2
- 森田武 (1993) 『日葡辞書提要』 清文堂出版
- 屋名池誠 (2005) 「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」 築島裕博士  
傘寿記念会編『(築島裕博士傘寿記念) 国語学論集』 汲古書院
- 山田俊雄 (1978) 『日本語と辞書』 中央公論社
- 湯沢質幸 (1987) 「漢字の慣用音」 佐藤喜代治編『漢字講座 第3巻 (漢字と日本語)』 明治書院
- 湯沢質幸 (2017) 『漢字は日本でどう生きてきたか』 開拓社
- 吉田金彦 (1971) 「辞書の歴史」 阪倉篤義編『講座国語史第3巻 語彙史』 大修館書店

## 参考資料

- 沖森卓也・三省堂編修所編 (2023) 『三省堂 五十音引き漢和辞典』 第二版. 三省堂.
- 北原保雄編 (2021) 『明鏡国語辞典 第三版』 大修館書店
- 国立国語研究所 (2021) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』 (BCCWJ) ver. 2021.03  
<<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
- 国立国語研究所 (2022) NINJAL-LWP for BCCWJ (N(LB)) <https://nlb.ninjal.ac.jp/>
- 国立国語研究所 (2024) 『日本語歴史コーパス』 (CHJ) (中納言 ver.2.7.2 データ ver.2025.03)  
<<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>>
- 国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>
- 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース <<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>>
- 佐藤進・濱口富士雄編 (2016) 『漢辞海』 第4版
- 三省堂 辞書ウェブ編集部 (2024) 「新明解日本語アクセント辞典 第二版 新装版」  
<<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dict/ssd13468>>
- 小学館国語辞典編集部編 (2005-2006) 『精選版日本国語大辞典』 小学館
- 土井忠生・森田武・長南実編訳 (1980) 『邦訳日葡辞書』 岩波書店
- 徳弘康代 (2008) 『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』 三省堂
- 藤堂明保編 (1980b) 『学研漢和大字典』 学研
- 藤堂明保編 (2006) 『漢字源』 学研
- 『明治文学全集』 (1965-1989) 筑摩書房 Japan Knowledge 版
- 森田武編 (1995) 『邦訳日葡辞書・邦訳日葡辞書索引』 岩波書店
- DHSJR 資料横断的な漢字音・漢語音データベース バージョン “20250310”  
Database of Historical Sino-Japanese Readings
- Japan Knowledge オンライン辞書・事典検索サイト <https://japanknowledge.com>
- NHK 放送文化研究所編 (2019) 『NHK 発音アクセント新辞典』 NHK 出版.